

2015 年 7 月 21 日

総合タイトル

愛と^{いのち}生命の教養教育—恋の予感から子育てまで—

日 時： 2015 年 7 月 28 日 (火) 16:20~18:30 (2 時間 10 分)
場 所： マルチメディア教育研究棟 2 階 M206 教室 (マルチメディアホール)

事前配付資料

教養教育院総長特命教授などによる公開の合同講義を行います。この講義は、総長特命教授担当の総合科目受講者はもちろん、学生・教職員すべてに開かれています。

今回の講義では、共通テーマを「愛と^{いのち}生命の教養教育—恋の予感から子育てまで—」とし、前半 45 分の講義を行った後、休憩をはさみ、受講者とともに討論を行います。

【講義】

- ・「愛と生命：生物学および社会的帰結」 山口 隆美 (生体医工学)
[教養教育院総長特命教授/医工学研究科特任教授]
- ・「学校で学ばなかったこと、子育てから教えられたこと」 羽田 貴史 (教育学)
[高度教養教育・学生支援機構副機構長/キャリア支援センター長/教授]
- ・「日々精一杯」 田中 真美 (医療福祉工学/バイオメカトロニクス)
[医工学研究科/工学研究科教授、男女共同参画推進センター副センター長]

【討論】

- ・森田 康夫 (数学・数学教育) ・工藤 昭彦 (農業経済学)
- ・野家 啓一 (哲学) ・吉野 博 (建築環境工学)

【司会】

- ・座小田 豊 (哲学)

◆この資料について◆

この合同講義は受講者の皆さんも参加する 1 つの授業です。後半は皆さんにも発言していただきたいのです。この資料はそのために予め、前半に 3 名の教員が講義する内容の概略を、総合科目受講者の皆さんにお知らせするものです。これを読んで感じたこと、質問したいことを準備しておいて下さい。また、この資料は教養教育院のホームページからダウンロードすることもできます。

当日講義を聴きながら考えた、あるいは予め考えてきた質問やコメントを『質問・コメントシート』に記入して、休憩時間に提出して下さい。その中の幾つかを採り上げて討論の材料とし、残りは教養教育院のホームページの特集コラムでお答えします。

当日配付する資料の中に、今回の資料の最後にあるような質問・コメントシートを複数枚添付しますので、聞きたい相手 (複数指定可) ごとに別の紙に書いてください。

【教養教育院ホームページ】 <http://www.las.tohoku.ac.jp>

愛と生命：生物学および社会的帰結

山口 隆美（教養教育院総長特命教授・医工学研究科特任教授）

・ 「恋におちる」ということの生物学

私たちは、地球上のほとんどの生物と同様に、両性生殖する生物である。生物、生命体の本質的特徴を一つだけ挙げるとしたら、それが生殖であることは、すべての生物学者の一致する見解である。生殖なくして生命はない。従って、私たちは生殖可能年齢に達すれば、必ず恋におちる。恋におちることは、何人にも、どんな制度にも止めることができないことは、歴史が証明し、古今の芸術・文学が繰り返し描いてきたところである。

・ 「愛する」ということ

恋におちることによって、愛が生まれる。上に述べたことに従って、愛することは、生物としての本質に基づき、性的なものである。現実では、社会的・制度的な束縛は多いが、しかし、愛する二人は、必然的に性交渉をする。ヒトでは、他の動物（がどう感じているかは分からないけれども）に比べて、ある意味で必要以上にセックスがもたらす快感・満足感が大きいようである。確かに、愛する人と、性を享受することは素晴らしいし、それは、本質的に人が生きていることの悦びと成長・向上の意欲につながっている。

・ 愛と性の生物学・医学

性に、必然的に愛が伴わなければならないわけではないが、しかし、愛のないセックスは、その最も本源的なもの—相互の尊重—を欠く。愛するというを一語で定義することはできないが、愛し合う二人は互いを思いやる気持ちと行動を欠かせない。合意と、従って愛に基づかないセックスは空しいし、場合によっては犯罪ですらある。とりわけ、性行為に伴う伝染疾患を知り、あらゆる手段でそれを避けることは愛の基本である。

・ 子供が出来るということ

セックスは本来的に生殖の手段として、これほどまでの快感が報酬として用意されているのだから、健康な男女が何らの避妊手段をとらないで性交すると、およそ 85%の確率で妊娠する。最も確実に近い避妊手段はピルであるが、これでも 100%ではない。結果的に絶対確実な避妊の方法はない。これは、我々が生物であることの帰結である。

・ 社会的帰結

しかし、妊娠したら、結婚し、出産することを真剣に考慮することを勧めたい。二人が若年であればあるほど、妊娠・出産に伴う危険は少なく、生まれる子供が健康である確率が高い。なにより、子供をもつことは、いわば、広く人類に責任をもつことにつながり、また、親となること、子育ては重圧であるばかりではなく、何ものに代えがたい素晴らしい経験でもある。我が国では、まだまだ、このようなカップルと家族への支援は十分ではないけれども、今回講演する演者の私たちが子供を授かったときに比べれば、状況は信じられないほど改善されてきた。そもそも、子供が生まれ、育つことは社会の成り立ちの基本であるから、先進国において支援が後退することは考えにくい。社会的な支援の制度を見だし、利用することを追求すれば、必ず道は開けると信じたい。

学校で学ばなかったこと、子育てから教えられたこと

羽田 貴史（教育学） 高度教養教育・学生支援機構副機構長／キャリア支援センター長／教授

1. 共稼ぎ・生活のルール・出産

今から30年前、福島大学在職時に、小学校教師の妻と結婚し、家事の公平な分担（当番表の作成）と家計の公平な負担（必要な生活費＋貯金を計算して給料比で負担）を取決めた。家事当番表には、後に、子どもたちも加わった。先輩女性教員の助言「陣痛促進剤を使わず自然分娩を」に従って病院を選び、呼吸法を学びに夫婦で通った。出産時に一晩中腰をさすり続けた私の手のひらは腫れてむくんだ。かいあって、助産婦さんに取り上げられ、「私は誰？どこにいるの？」とでも言いたげに周りを見回して大声で泣く娘が誕生した。

2. 育児・保育園

出産後は、おむつの洗濯（紙おむつは不燃ごみの上、おむつ離れが遅い）、お風呂入れを担当、妻が復職してからは、保育園への送り迎え、夕食準備、お風呂の当番。遊びや自然を大切にする保育園を選び、遠いので引っ越した。毎月保護者懇談会があり、6時半から8時過ぎまでの懇談会は疲れたが、夫婦二人だけで不安に陥りがちな子育ての助けになった。保護者の結びつきも強く、「親父の会」もできて（実質は飲む口実だった）、楽しく過ごした。本読みは、親も楽しく、福音社、ポプラ社のシリーズを購入、毎晩読み聞かせ、「モウイッペン！」とせがまれ、7回読まされたことも。

娘3歳の時に第2子を出産。産室の入り口に私と娘が立ち合い、「お母さん、がんばって！」と声をかける娘の姿があった。息子も0歳児保育で2人の送り迎えが加わり、時間になると教授会だろうが退席して帰った。

3. 転勤と家族

娘が小2、息子が年長になる時、広島大学に転勤する。妻も教員採用試験に合格し、共稼ぎ・子育ては継続するが、大学がある東広島市の保育所は4時20分までしか預からない。6時まで保育する隣の熊野町（筆の生産日本一）にアパートを借りて2年間過ごし、息子が小学校に上がる時に大学の近くへ住まいを移した。息子は学童保育へ。たまたま、最初の保護者会でもめ事の仲裁に入ったことから、指導員に頼まれ、保護者会の会長になり（2年間）、続いて地域子供会の役員（2年間）、地域とのつながりも強くなり、娘が高校生の時はPTAの広報委員を務め、広島大学の最後の年は、町内会長（約250世帯、1000人）となって、ゴミ置き場を荒らすカラス対策に追われた。

家族のつながりは大切、私の実家（北海道・帯広）、妻の実家（福島・小高）への帰省は娘が高校生になるまでは、ほぼ毎年（10回以上）、帰省時にはついでに北海道各地を回り、双方の家族と旅行、年に1度は家族での旅行や温泉旅行は、今も続いている。高校進学は、私立進学校と程よい進学校である県立高を受験させ、県立高に二人とも進学させた。進学のための勉強で高校生活を過ごすのではなく、いろいろな経験をして欲しかった。娘は、飽き足らず2年生の時にAFSに応募して1年間オーストラリアの高校で過ごした。戻ってくると2年生の科目を取っていないので成績が伸びず、京都のR大学の指定校推薦に飛びついて、3年生の秋からは好きな読書三昧の日々。息子はアナウンス部でのんびり過ごし、東京に行きたくて、M大学に進学した（大都市圏の私立大学進学につき込んだお金は総額2200万円強。在学が重なった時は500万円の出費になった）。

4. 就活

就活への援助は、親としての最後の仕事。なかなか成果の出ない娘の様子を聞くと、志望先の方も曖昧で、これではまずいと対象職種の絞り込みや志望企業の研究、プレゼンの準備も付き合い、独立行政法人に就職した。息子にも同様な指導で公務員に就職した。子育ては終了し、大人としての親子の付き合いになる。

5. 総括

子育てを通じ、人として生きる上で大切なことを学ぶ機会であった。手のひらに載るほど小さな赤ん坊が生長して一個の人間となる神秘さ、秘められた生命力への感動、人を人として育てる力が自分にあるという自己の再発見、子どもの人生を通じて自分の人生と親の人生を体験し、人生の意味を理解すること、さらに、子育ては、職場の人間関係に止まらず、いろいろな人々と知り合い、地域社会を作るきっかけを与えてくれたのである。

では、高校や大学で学んだことは、子育てに役立ただろうか。残念ながら、子育てを終えてみると、日本の学校教育には、人間が人として生きる重要なエッセンスが欠けており、大切なことが装備されていないと言わざるを得ない。大学教育を、自分の人生にどう活用すべきか、どう学ぶべきか、大学教育はどうあるべきか、子育てを終えた親の視点と高等教育研究者の視点で、皆さんに助言したい。

日々精一杯

田中 真美

今回の授業にあたり何を話すべきか大変悩んだ。「愛と生命の教養教育 いのち—恋の予感から子育てまで—」、壮大なタイトルである。そして私に声がかかった理由を考え、子育てをしている女性研究者だからかなと思い、引き受けたが、100人100通りあるわけであり、受講者の皆様には私はそのほんの一例だと思っていただければ幸いである。

私は、東北大学工学部に入学・卒業し、修士課程へ進学し、その後助手になった。ドクターの学位取得を目指しながらの教員であった。日々研究の日々であり充実はしていたが、研究者として生きていくという心づもりができたのは、講師になる少し前位だったと記憶している。

講師の時に全学の男女共同参画委員会の工学部の委員として出席した。その委員会で女性教授を見たことが、その後の私に大きく影響している。それまでは、工学部には女性教授はいなく、「教授になる」ということを全く意識したことが無かった。その委員会では女性教授達が、委員会を取り仕切っていた。私は、委員会終了後すぐさま研究室に帰り、私のボスに「先生、女性教授がいました！東北大学には女性教授がいるんですね！！」と興奮して報告したことを覚えている。ボスはその興奮に驚きながらも「おお、そうか、君も目指したまえ。」と言ってくれた。と言ってすぐさま何が変わるわけでもないが、平日の研究の日々の中に、私の中で女性教授というものが人生の選択肢として見えた初めての時であったと思い出される。

夫とはちょうどこれくらいの時期に学会で出会った。「女性研究者って得だよな。すぐ皆に覚えてもらえるし。」と言われたことが第1印象であった。変に気を使われるよりも歯に衣着せぬ感じが、誠実に思えたのかなと思い出される。結婚してすぐ、私がフランスに10か月行ってしまい、それについて今でもブツブツ言われる時がある。とはいえ、現在も私が思いのままに生きていることを許容してくれる懐の深さに、常に感謝している。

一人息子がいるが、出産して変わったことは時間が限られているので、無意識のうちに、プライオリティについて考えて行動していることである。学校でできること、家でもできること、今指示しないといけないことなど。無意識のうちにそれを考え、実施している。また、色々な支援制度を利用しながら研究を行っているが、正直な所思ったほど両立は出来ていないと思うけれども、それで「よし」とすることとしている。私自身が出産後、完全な復帰ができると思っていたが、それは甘かったとすぐ痛感した。少し無理をすると、すぐ子供が病気になるのである。これは息子が赤ん坊の時から小学校になった今でもあり、無理は出来ないのだなと悟った。最初は何もできないとイライラしていたのだが、それが無理なものだと悟ったら、ストーンと気が楽になり、そしてできることを精一杯行おうと思うようになった。

以上、常々目の前のことを精一杯クリアしている。ただ、いつも感じるのは、周囲にはとても良い提案やコメントをさせていただける方々が多くいる。そして、手前みそながら私はそれを素直に受け入れているように思うし、人の言うことを聞くのは大変ためになっている。また、理解してもらうためには自分の状況も話すことが重要である。「恋の予感から子育てまで」、人として、互いに尊敬しあうことに尽きると感じている。

質問・コメントシート見本 [A5 カラー用紙]

東北大学教養教育院 総長特命教授合同講義

「愛と生命の教養教育—恋の予感から子育てまで—」

2015年7月28日(火)16:20~18:30 マルチメディア教育研究棟 M206

質問・コメントシート

学籍番号		所属		氏名	
◇講義内容に関する質問・コメント(どの講義かチェックしてください)					
<input type="checkbox"/> 山口 隆美 <input type="checkbox"/> 羽田 貴史 <input type="checkbox"/> 田中 真美					
(質問・コメント)					
◇講義内容以外の質問・コメント					
(質問・コメント)					